

がんばれ日本！ 世界は日本と共にある

東日本大震災直後から、世界各国・地域は日本に対して数え切れないほどの励ましのメッセージを届け、援助の手を差し伸べてくれた。それらの支援には、どのような思いが込められているのだろうか。また、私たち中学生は、その支援にどのように応えていけばよいのか考えてみよう。

1 世界各国・地域からの励ましや祈り

【モンゴル】
孤児院の子供たちが生活保護費の一部を義援金として日本に送った。

【ポーランド】
「日本人なら料金はいらない。これが今、日本人にできることだから。」と言って、タクシーの運転手は料金を受け取らなかった。

【クロアチア】
被災した仙台市の子供たちを招待し、国賓級の待遇でもてなした。

【ガーナ】
被災者のために「伝統的な儀式による特別な祈り」が実施された。

【イラン】
プロサッカーリーグの試合前、選手たちはセンターサークル上で一つの輪を作り、黙とうした。

【中国】
2008年に四川大地震を経験した中学校で「災害は一時的。同じ土地で楽しく暮らせる日は必ず来る。」と被災者を励ます手紙を書いた。

【韓国】
「呼ばれなくても行くのが隣人だ。」救助犬チームは、震災翌日、宮城県に到着した。

【台湾】
大地震や台風災害の時に支援を受けた日本のために、多くの人々が義援金を寄せた。

【インドネシア】
2004年のスマトラ沖地震で被害にあった人々が追悼式を開き、震災犠牲者に祈りを捧げた。

【ニュージーランド】
日本語を学んでいる中学2年生から高校3年生までの生徒が、被災した方々に直接届くようにと、日本語の寄せ書きを大使館に送った。

【国連本部】
「日本は今まで世界中に援助をしてきた援助大国だ。今回は国連が全力で日本を応援する。」と発表した。

【アルゼンチン】
被災者支援集会で「ガンバレ日本！ FUERZA JAPON！ 私たちの心は皆さんと共にある」と記された横断幕が掲げられた。

世界中から心の込められた励ましの言葉、支援物資や義援金等が寄せられた。こうした海外からの援助や日本国内のボランティア支援など、多くの人々に支えられて東日本大震災の復旧・復興は今も進められている。

2 世界各国からの迅速な支援

震災後数日のうちに、7つの国・地域（韓国、台湾、米国、シンガポール、中国、スイス、ドイツ）が被災地に入った。その中でも、仙台市にいち早く消防防災庁職員などで構成されるレスキューチームが到着したのは、お隣の韓国だった。



写真提供：駐仙台大韓民国総領事館

3月12日に救助犬チーム（人員5名と救助犬2匹）、さらに3月14日には追加支援隊員102名が派遣され、総勢107名の救助隊が活動を始めた。警察と共に、救助犬や機器類を利用して、被害が大きかった宮城野区蒲生地区などで行方不明者の救助・捜索活動を展開した。

また、震災後約2か月間では、23の国と地域からの緊急援助隊や医療チームが日本を訪れた。その存在と活躍ぶりは、各地の被災者の方々を大いに勇気付け、励ますものだった。

3 第3回 国連防災世界会議（H.27.3.14～3.18）の開催

国連防災世界会議は、国際的な防災戦略について国連機関や各国の首脳陣が議論する国連主催の会議であり、第1回（1994（平成6）年、横浜）、第2回（2005（平成17）年、神戸）の会議とも、日本で開催されている。仙台市を会場にした第3回目の会議では、パブリック・フォーラムも含め、延べ15万人が参加して東日本大震災の教訓を踏まえた防災・減災を議論した。その結果、これから15年間の新しい国際的な防災の指針である「仙台防災枠組2015-2030」と、防災に対する各国の政治的コミットメントを示した「仙台宣言」が採択された。



制作されたタンブラーとフォーラムでの発表の様子

仙台市内の小中学生も、防災会議参加者への記念品「タンブラー」の制作や、パブリック・フォーラム『新たな防災教育「3・11から未来へ」』で防災への取り組みを発表し、仙台を訪れる様々な国の人たちへ「3・11から未来に向けて力強く歩む子どもたちの一人一人の思い」を世界に発信した。

私たちの防災や復興への取り組みは、これからも世界の中で指針となり、その実行と協力を期待されている。